

令和 6 年度 第 2 回伊達市総合教育会議 会議記録

開催年月日		令和 7 年 1 月 15 日（水）		
開会時刻		午後 1 時 30 分	閉会時刻	午後 2 時 43 分
開催場所		伊達市役所 401 多目的会議室		
出席の状況（○出席、×欠席）				
1	伊 達 市	市 長	須 田 博 行	○
2	伊 達 市 教育委員会	教育長	渡 部 光 毅	○
3		委 員	関 根 勝 富	○
4		委 員	貝 羽 貴 子	○
5		委 員	穴 戸 弘 治	○
6		委 員	中 野 昭 子	○
事 務 局		(伊達市) 総務部長、総務課長		
		(伊達市教育委員会) 教育部長、こども部長、教育総務課長、生涯学習課長、学校教育課長、学校給食センター所長、こども未来課長、ネウボラ推進課長、生涯学習課主幹、学校教育課参事、こども未来課主幹		
会 議 内 容		1. 開会		
		2. 市長あいさつ 令和 6 年度第 2 回伊達市総合教育会議の開催にあたりまして、一言ごあいさつを申し上げます。教育委員の皆様には、日頃より本市の教育行政にご尽力をいただいておりますことに対し、深く感謝申し上げます。 先日「二十歳のつどい」が開催されました。市内の中学校を卒業した 560 名のうち、約 500 名の青年たちが出席しました。卒業生の約 9 割にあたる若い青年たちが出席し、今までにない出席率だったと思います。青年たちの健やかな表情から、伊達市または日本の将来を担っていくという希望に満ちた気概を感じました。そのような青年たちに、将来伊達市で活躍していただけるような、魅力ある市にしていかなければならないと強く感じました。		

伊達市においては、現在、若者が定住できるまちを目指しております。まずは、働ける場所をつくるため、工業団地を造成しました。工業団地には6企業が入り、3つの企業はすでに営業を開始しております。残りの3社についても、今開業に向けた準備を進めているところです。

子育てについては、安心して子どもを預けられる、また、子どもを預けて働きに出られる環境作りが重要だと考え、昨年は3つの認定こども園に着手しました。2つの園はすでに開所しており、もう1つについても、今年の4月に開所する予定になっております。また、学校が終わった後に、子どもたちが安全にのびのびと過ごせる場所として、上保原の放課後児童クラブを更新しました。

住める場所については、高子駅北地区に住宅団地を造成し、今分譲を進めているところです。また、民間においても市内各地で住宅団地の造成を行っており、若い人たちが住む環境が整えられていると思っております。

楽しめる場所については、ご存じのように、イオンモール伊達が2026年の下期、あと1年半後には開業することになっています。働ける場所として、また、そこに来たお客さんが市内を回遊してもらうことで、伊達市の経済発展にも大きく貢献していただけたと考えています。このように、現在、将来に向けた基盤がしっかり整えられている状況になっております。そのような基盤を使って、若い人たちが定住できるようなまちになればいいと思っております。若い人が定住することで子どもたちも増えるので、しっかり若い人たちの定住を進めて、これからの伊達市の教育、子育て行政を進めていきたいと思っております。

前置きが長くなりましたが、本日の総合教育会議は、市と教育委員が教育行政における課題や方向性を共有し、地域の実情に応じた教育、学術及び文化振興を図るための施策について協議をしていただく場になっております。

本日の会議では「小中一貫校「月舘学園」の現状について」、そして「「子育て・就学」相談支援事業について」の2つの議題について、ご協議をいただくことになっております。

本会議を通じて、教育委員の皆様と共に、様々な課題に取

り組み、教育施策について協議及び調整を図って参りたいと思いますので、活発なご議論をお願いいたしまして、私からの冒頭のごあいさつとさせていただきます。本日はどうぞよろしくをお願いいたします。

3. 前回協議事項の進捗報告

事務局（こども部長、生涯学習課主幹が資料に基づき説明）

4. 協議（議長…市長）

協議事項（1）小中一貫校「月舘学園」の現状について

事務局（学校教育課参事が資料に基づき説明）

○関根委員：今回月舘学園がテーマということで、事前に保護者の方や PTA 役員の方、先生方と懇談の場を設けて、意見や要望を聞いてきました。それについて、箇条書きではありますが、資料にまとめさせていただいたので、お話しさせていただきたいと思います。また、ただいま佐藤参事の方から説明いただいた部分と重なる部分もありますが、ご了承願えればと思います。

まず、現状としましては、やはり施設一体型の小中一貫校ということで、小学生と中学生が一緒に生活をします。しかも、小規模校のため、小学生と中学生が近い場所で生活するので、行事などはもちろん、普段の休み時間においても、小さな子と中学生が一緒に遊ぶことがあります。いろいろな学校を回ってきた先生方からも、そのような光景はなかなかないと言われており、この学園オリジナルとも言えます。そのような生活がいい方向に作用して、子どもたちも安定して生活していただけるのではないかというお話がありました。

先生方についても、職員室が小学校と中学校が一体なので、連携が取りやすいそうです。先生方全員が同じ考え方のもとで全部の生徒を見られるので、何か問題がある生徒がいても全員で対応できるため、とても安定しているというお話をいただきました。それによって、いわゆる「中1ギャップ」の軽減など、いい方向に進んでいるということでした。

今後の課題という部分では、やはり児童生徒数の減少が挙

げられました。対応としては、月舘学園の良さや特徴をアピールする必要があるというご意見をいただきました。特に、これから小学校に上がる子どもを持つ、幼稚園や認定こども園の保護者の方へのアピールなど、月舘に来てもらえるような工夫が必要なのではないかということでした。これまで他校から転校してきたお子さんについては、実際に月舘に縁がある方、例えば、おじいちゃん、おばあちゃんが月舘に住んでいて、月舘に来たという子はもちろん多かったのですが、全く関係がなく月舘に来た子もいました。中には、元の学校で不登校気味だったなど、何か問題があって、中学校に上がるのをきっかけに転校してきた子もいます。そのような子どもについて、徐々に慣れて保健室や別室登校になってきている子もいれば、まだ学校に来られないという子もいるのが実情です。ただ、そのような子どもについても、先生方が一体となって対応して、徐々に改善している面はあるようです。一方で、余りにもそういった児童生徒が多くなると、先生方の対応が大変になるという問題もあります。そのため、先生の数を増やしていただいて、専門のスペシャルサポートルームなりができれば、そういった不登校の児童生徒が通う学校の選択肢のひとつになり、月舘学園が選ばれるような形になるのではないかというお話があり、今後の要望としてお願いしたいというところでした。

スクールコミュニティについては、先ほど佐藤参事の方からもお話がありましたが、子どもたちが気軽に遊びに行ったりお話に行ったりして、とてもにぎやかな場所です。しかし、昨年度までは2名体制で運営していたスクールコミュニティが、今年度は1名体制になりました。それにより、通常の業務をこなしながら子どもたちを相手にするのは、なかなか大変だったという意見がありました。もし、可能であればスクールコミュニティの職員数を増やしていただいて、子どもたちの居場所づくりのため、対応をお願いしたいと思います。

部活動についても、やはり人数が少ないため、今後部活動の地域移行がどのような形で進むかにもよりますが、自分のやりたい部活をできるような体制が整うことを望む声がありました。

保護者の方からの要望という部分では、中学生はなぜスクールバスに乗ることができないのかということをよく言われます。それについては、他の学校との兼ね合いや予算の都合があり、仕方がない部分なのは承知しております。しかし、現状として、小学生は希望者全員がスクールバスに乗っており、登校の場合は2方面を2台で2便ずつ運行しています。ただ、子どもの数が減ってきたことにより2便は必要なくなることから、1便分が空くので、その1便分に中学生を朝だけでも乗せてもらえないかという提案がありました。帰りに関しては部活動などで時間がバラバラになるので、帰りはそれぞれの対応という形で、何とかお願いできないかという要望をいただいております。

最後にまとめとしまして、月舘学園以外にも特色のある学校はあります。そして、どこの学校でも学びの内容は同じかもしれないかもしれませんが、それぞれの学校に特徴があるということをまずは理解していただきたいと思います。特に、月舘学園は特認校と呼ばれる小規模校で、どこからでも通える学校です。そのことをもっとオープンにして、選択してもらえるような体制ができれば、人数も増えてくるのではないかと思います。以前は、学校同士で子どもの取り扱いになるようなことはよくないという話もありましたが、とはいえ一度に何十人も転校することはないと思いますし、そういった中で、各学校の特色を出して、選ばれるような学校にしていく必要があるのではないかと思います。以上、私の方で聞いてきた意見と要望についてでした。

○市長：ありがとうございます。今関根委員からお話があった内容について、事務局から、月舘学園の特徴に対してのコメントや、今の話を補足するもの、課題について現在方向性として答えられるものがあれば、お願いしたい。

○学校教育課参事：月舘学園の特徴については、先ほど「(1)小中一貫校「月舘学園」の現状について」の中で述べた部分が大きな特徴です。昨年まで私が月舘学園に在任していたときも、いろいろなお客様がいらっしゃったり、興味がある保

護者が電話をくださったりしました。その際には、要点を絞って、先ほどの部分をお伝えしていたところです。ただ、特認校であるという部分については、なかなかわかっておられない方も多かったので、そういったところはきちんと説明するようにいつもしてきたところです。

課題の部分については、やはりスクールバスの問題は以前から保護者の声として伺っていたところで、今後の課題として共通の認識でいたところです。ただ、現段階では、伊達市全体を見ながらの対応ということになりますので、今後の課題として捉えさせていただければありがたいと思っています。また、児童生徒数の減少という部分については、今後どんどん減少していくのが目に見えています。そういった中で、教員の配置についてどんな工夫ができるのか、現在教育委員会でも考えながら、校長の方と話をしているところです。

○市長：月舘学園は特認校ですので、その特徴を市内外に知ってもらえるようにしていかなければいけないと思います。英語教育や ICT 教育が先端を行っているだけでなく、英語やその他の学科についても、学力テストの成績が県内でも上位ということを見ると、まずは学力が高いということをアピールした上で、今お話のあった、子どもたちが通える環境をどう整えていくかということ、これから考えていく必要があると思います。

部活動の今後については、自分のやりたい部活動への入部を希望して、他校へ転校というのは現実的にあることか。

○学校教育課参事：はい。ありました。

○市長：地域のスポーツクラブや部活動の地域移行については、月舘として活動できるか、それとも他の学校と一緒に活動していくのかということも、これから考えていかなければならないと思っています。

○貝羽委員：関根委員に質問ですが、小中一貫校になったことに対する保護者の方々の率直な感想について、あくまで関

根委員の感じた限りで構いませんので、その辺を伺いたいと思います。

○関根委員：否定的な人はおらず、今の形で満足しているという部分は多々あります。初めは、2校あった学校が片方なくなるということで、いろいろありましたが、学校が1つになり人数も減ってきた中で、まとまってきていると思います。また、小中一貫校になるまでを知っている、または知っていた保護者がだんだんいなくなり、今の学校の形になってから子どもを通わせているというのが現状です。そのため、今の体制に対して、先ほども言いましたが、なぜスクールバスに乗ることができないのか、という意見が出てきて、難しい部分もあります。ただ、保護者としても、子どもたちが本当にいい子で安定している、という意見はあります。

○貝羽委員：例えば、メディアなどで時々紹介される、山村留学のような、そういう子たちを受け入れるような計画はありますか。

○学校教育課長：今のところ、そこまでの計画はありません。学校は違いますが、お母さんが妊娠して実家に戻るために、その期間に戻りたいという要望には、別な学校で答えている現状はあります。

○貝羽委員：山村留学のようなものを積極的に取り入れると、それをきっかけに伊達市に移住したい人も出てくるのではないかと思いますので、すぐには無理だとしても、そういう方向を考えていただいてもいいのではないかと思います。

○市長：山村留学などの特殊なケースについては、そういう学校にするためのハードルや手続きはあるのか。

○学校教育課長：手続きは特段ないとは思いますが、保護者の住環境なりが整備できればということかと思います。

○市長：例えば、子どもたちが心を病んで、回復するまでのある一定の期間に留学する、というような方法もあるのか。

○総務部長：最終的には住民票の異動になりますが、一番の課題は、やはり地域での受け入れ体制であると思います。全国の事例を見ても、里親制度や寄宿舍など、子どもたちの面倒をどうやって見ていくのかが課題になってきます。子どもがある程度大きくなれば、下宿のような形でも対応できるかもしれませんが、そういった面では、行政がどこまで対応できるのかが重要なところかと思っています。また、地域でそういう環境を作っていくことが果たして可能なのかという部分もありますので、行政と地域が一体になって、いろいろ考えていかなければならないと思います。結果的には、そこに住んで学校に通ってもらおうということになりますので、行政だけでなく、地域の方のご協力をいただくということも必要に応じて出てくるかと思っています。

○市長：課題はいろいろありますが、山村留学などの方法も、児童生徒数を増やすための1つの手段だと思います。現状のままでは、厳しい児童生徒数になってしまうので、教育ばかりでなく市の政策を投入して、考えていかなければならない問題だと思っています。

○宍戸委員：月舘学園は、小学校と中学校がそのまま同じ体制でいくので、みんな友達関係にあります。しかし、通常は中学校にはいくつかの小学校から人が集まるため、知らない人たちと同じクラスになります。そこで適応できずに不登校になる子も出るかもしれません。そういうことが小中一貫校ではないのは利点です。反面、高校に行こうが行くまいが、いつかは不特定多数の人のところに出ていかななくてはなりません。私事で申し訳ないですが、自分が梁川という田舎から福島の高校に入学したとき、教室に同じ中学校から入学した人は誰もいませんでした。そして、教室では、とても田舎の言葉とは思えない会話が聞こえてきて、昼休みにどうしていいかわからず、教室を出て外を眺めていたという記憶があり

ます。月舘学園では、地域との交流も盛んで、世代間交流も行われていることと思います。積極的に人と交流することは、コミュニケーション能力や自立心を育むことにつながります。そのようなひとり立ちできる仕組みを、今後もぜひ積極的に進めていただきたいと思います。

○市長：月舘学園において、小学校から中学校に進学する際にギャップがなかった子どもたちが、高校に進学したときにどのような反応を示しているか、具体例はあるか。

○学校教育課参事：高校に進学して、そのギャップから高校を辞めるほど悩んでしまったという話は、私が在任中の２年間は聞きませんでした。ただ、当然そういう心配は、教育相談の中で保護者も生徒も持たれているところではありましたので、そういう状況に負けない子どもたちをどのように育てていくのかということは、学校経営上の大きな課題の１つであったのは確かです。それを補う部分として、地域の方々との交流の機会を積極的に作っていくために、いろいろな方と関わる機会を、他の学校よりもたくさん作ってきたというのは実際のところでした。当然、同じ仲間との意見の違いも、いろいろな教育活動の中では出てくるので、お互いの主張を大事にしながら、考えをすり合わせていく機会についても、各教科で意図して作っている部分はあったというのが現状です。

○市長：そういった課題についても、小中一貫校の中で解決できるようにしていきたいと思います。

○中野委員：月舘学園の課題や今後について、英語に力を入れて成果があったということですが、児童生徒数が減ることによって、教員数も減らされてしまうのか、また、ALTの常駐についても、今後も続けられるのかをお聞きしたいです。今までの特色として、英検の成績がよかったり、学力も高かったりした部分が、児童生徒数の減少による教員数の減などにより、そういう強みが弱くなってしまっているのが心配です。

○学校教育課参事：まず、教員については、学級数に応じて県で配置する教員の数が決められています。もちろん法令に沿っての数になります。ただ、県において、基本の数にプラスして教員を配置する加配措置もありますので、そういう仕組みを活用しながら、できる限り教員の体制は継続していけるようにしたいと考えています。とはいえ、小学校で完全複式になれば、今よりは教員数は少なくなるので、複式の中での教育課程をどう組むのかを考える必要があります。また、教頭や校長も入った教育活動のあり方についても、私が在任していた間に検討を開始しており、カリキュラムの部分で特色を継続できるような方向性を考えていたところです。また、ALT については、市で配置する部分ですので、継続して取り組んでいきたいと考えております。

○中野委員：月舘学園は英語が特色ある学校だということで、継続していけるということですか。

○学校教育課参事：そのようにしていきたいと思います。

○教育長：小中一貫校にしても今流行の義務教育学校にしても、作った段階では特色は出せますが、いかにそれを持続していくかということが非常に難しく、それは伊達市だけではなく、他の市町村でも同じことだと思います。ただ、これからの国際情勢を考えたときには、やはり英語教育という部分は外せないと思います。今後、子どもたちの数が減っていくという現状はありますが、私としては、伊達市の教育における1つの大きな目玉として、予算もかかることではありますが、県教委とも話をしながら、月舘学園の英語教育を今後も充実させていきたいと思っています。そのためには、やはり英語の授業の質をもっと上げていかなければならないと思います。月舘学園ができたばかりの頃は、オールイングリッシュの授業についての目標もありました。なぜ英語の先生が複数もいてそれができないのかと言われれば、やはり学校としても考えなければならぬと思います。数の問題という部分も

ありますが、現状の質をもっともっと上げていくことで、月館学園の魅力というものを発信していきたいと考えています。月館学園ができてから何年か経っていますので、月館学園の現状についても、果たして幼稚園の今の保護者の方々が理解されているかどうかという部分があります。いつも市長も言いますが、見える化することが大事なので、市政だより等に、改めて月館学園の現状と魅力というものを発信していく必要があると思います。月館学園は特認校のため、いろいろな学校から入ることができます。実際には道が通っていますし、それほど遠くありませんが、どうしても保護者の方は、学校への交通手段や通学の時間のことを考えてしまいます。しかし、月館学園の現状と魅力を社会に向けて発信することで、英語を学びたい、オールイングリッシュの授業を受けたいという子どもたちや保護者がいれば、まだまだ改善する余地はあろうかと私は思います。ぜひ教育委員会としても、質の向上という部分を再度考えていきながら、今後の方策についても、またご意見いただければと思います。

○市長：今教育長からオールイングリッシュという話がありましたが、日本人の英語力は国際的に見て相当低いというのが先日新聞に出ていました。我々が思っている以上に世の中は英語教育が進んでおり、他の国に比べて日本はあまりにも遅れています。これから国際人を育てていくためには、英語に強くなる必要があると思います。月館学園には、英語ばかりでなく ICT 教育などの特徴もありますが、英語といえば特に月館だと言われるようにしていきたいと思っています。

協議事項（２）「子育て・就学」相談支援事業について
事務局（学校教育課長が資料に基づき説明）

○関根委員：就学先の相談についてですが、私も子育てをしてきた中で、小さい頃に落ち着きがないと感じた子が、周りにおりました。そういう子が特別支援学級などに行き、適正な指導を受ける中で、大分落ち着いたという子をたくさん見てきました。逆に、就学先を勧められても断ったという保護

者や子どもたちも見てきましたが、そこで子どもの成長に差が出てくると感じました。そういった家庭を見ていると、基本的な「早寝・早起き・朝ごはん」などの習慣ができておらず、大きくなっても今ひとつきちんとした生活ができていない子が見受けられました。その子に合った学級で、その子に合った学びを得ることが、いかに大切かということを切に感じております。保護者の方や子どもたちの感想など、勧められた就学先に行ってよかったという事例や、先生方から見た子どもの成長の仕方など、もっとわかりやすい部分があれば、審議結果を拒否することは減るのではないかと思います。保護者としても、小学校に上がるときに突然話を出されたら、どうしてうちの子が、という戸惑いが当然あると思います。そこをいかにわかりやすく説得していくのが大事だと思うので、わかりやすい声を実例として挙げていただければと思います。

○学校教育課長：ご意見ありがとうございます。おっしゃる通りで、保護者や児童生徒に関しては、特別支援学級を選ぶということは、ものすごく大きな決断であると思います。ただ、特別支援学級に入って、子どもたちが安定をすると、保護者としてはすごく安心をします。その子に合った教育の場を得られて安心したというご意見は、多くの保護者からいただいております。一方で、審議結果を拒否した場合には、落ち着かない子そのまま落ち着かずに大きくなってしまいます。小学校低学年などの早い段階で手当ができれば、改善や落ち着いた生活につながりますが、子どもが大きくなればなるほど、落ち着いた生活につながりづらくなっていくということも、あわせてお知らせしていかなくはいけないことだと、今のご意見を聞いて感じました。

○市長：審議結果をお知らせするときに、保護者がどのような反応を示しているのか、また、それに対して教育委員会としてどのように話をしていくのか。

○学校教育課長：まず、この取り組みのねらいとしては、年

中児から教育相談を積み上げていきたいというところにあります。もっと言えば、こども部が行っている保健師との相談があります。それにより、もっと下の段階から相談を積み上げていくことができるので、こども部との情報交換はさせていただいております。また、保健師や相談支援員との話の中から、保護者の困っている状況に対応し、相談にのっていくという状態から、審議結果を伝える以前に大事な準備段階だと考えております。そういった取り組みが、この事業が始まってから審議結果の拒否数が減っている理由であり、納得につながっているからこそ、今心配しているので教育支援委員会にかけてほしい、というご意見につながっていると考えております。当然、生まれてからすぐの保健師さんの相談も、この審議結果の拒否数減につながっていると私は考えているところです。

○市長：教育相談の前に保護者の方もある程度自分の子どもの状況が捉えられているということか。

○こども部長：こども部で追加します。やはりこの辺りがネボウラの取り組みとつながっていると思う部分です。子どもが小さいうちから保護者との信頼関係を築いて、ずっとお付き合いをしている中で、就学にかかる保護者からの相談も、保健師に連絡がきております。ただ、保健師と話しているうちに、保護者の方も心の整理ができたり、何となく疑っていたことがやはりそうだったのかと納得したりすることがあります。やはり支援の質を上げるという意味で、教育と保健、幼児教育の連携がないと、この事業はなかなかうまくいかないと思います。

○市長：伊達市の場合には、こども部と教育部が同じ教育委員会の中にあるので、その辺の連携は非常に取りやすいかと思います。

○穴戸委員：感想になりますが、県立学校の場合、新入生のオリエンテーションは、当然３月中に行いますが、校長はそ

こには顔を出しません。あくまでも校長というのは、入学許可をして初めてその生徒たちの校長になるのであり、自分の学校の生徒でもないのに、今まで小学校の校長先生が保護者に審議結果を伝えていたということ自体、校長経験者の私としては、それはおかしいだろうと思います。校長にはその時点では何の権限もないので、このやり方が当然かと思います。

○市長：今は教育委員会の指導主事の方が面談をしているということですか。

○学校教育課長：はい。

○穴戸委員：市長も今おっしゃったことで、私も前から言っていますが、伊達市教育委員会のいいところは、他の市では、子ども支援の担当は当然保健福祉の部署であり、生涯学習の担当も市長部局にあるのが主流の中で、伊達市はその流れに逆行して、子ども支援を担当するこども部を教育委員会の中に持ってきています。だからこそ、表現は悪いですが、揺りかごから墓場まで面倒を見ることができ、関わるができます。この「子育て・就学」相談支援事業は、資料の最後にも書いてありますが、こども部との連携が不可欠です。そして、教育部の中でも、「早寝・早起き・朝ごはん」の社会教育を担当する生涯学習課も一体となって取り組む必要があると思います。教育委員会だけでなく、もちろん健康福祉部のある市長部局との連携も必要でしょうし、市全体として進めていかなければならないことだと思います。

最後に、特別支援学級の授業支援についてですが、だて支援学校には特別支援教育の専門の先生もいらっしゃいますし、ぜひ連携をしていただきたいと思います。

○学校教育課長：だて支援学校との連携については、進めていかなければいけないと考えています。今現在行っている連携としては、だて支援学校の施設に関して、小中学校の特別支援学級の担任や校長、教頭、管理職が研修でそこを訪れさ

せていただいて、校長先生からお話をいただくことがあります。いずれは学級の生徒が入学する可能性がありますので、そのような形での連携は進めているところです。また、だて支援学校との連携は、特別支援学級とだけでなく、桃陵中学校においては、通常学級の生徒がだて支援学校を訪れ、一緒に活動するという取り組みも行っております。そのような連携も深まれば、子どもたちにとっていい影響を与えるものと思いますし、そのような活動が他にも広がってくればいいと考えております。

○市長：「子育て・就学」相談支援事業については、伊達市として、また、市教育委員会として、このような形で進めていきますが、教育委員会の事業ということではなく、伊達市全体の事業として、市長部局との連携もしっかり進めていきたいと思っています。

協議事項（３）その他

なし

14：43 終了